創刊前後

杉原丈夫

わたしと斎藤槐堂氏が県立図書館に館長の久我元氏および郷土誌懇談会の幹事佐々木敏氏を訪問したのは昭和三十一年七月十四日である。「若越郷土研究」の発刊はこの日決定した。わたしは嬉しさのあまりこれを日記に記録した。

当時わたしは福井県民俗学会の会長であつた。この会は戦後福井新聞の吉田弥氏の肝入りで結成され、一時は毎月例会を開き、小冊子ながら会誌も発行した。それがいつのまにか活動不振となり、機関誌も休刊状態になつていた。これをもう一度起死回生させようというわけで、わたしが会長に引き出された次第である。

会誌発行に関しては、かなり具体的案が会員より提案されていたが、わずか二〇人ばかりの民俗学会員だけで定期刊行を維持することは不可能なので、何回かの討議のすえ、民俗学専門誌でなく、一般の郷土研

究誌として、郷土誌懇会の手もとで発行するのがよいという結論に達した。

そのころの郷土誌懇談会は県立図書館の主催する行事団体で、組織ある結社ではなく、会則も会費もない状態であつた。だから先ず郷土誌懇談会を改組し、会費を徴集して雑誌を発行しようというのである。

この話を図書館へ持ちこんだのであるが、図書館側としては久我さんも佐々木さんも大いに賛成され、具体的計画について何回か討議が重ねられて、ついに七月十四日発刊にふみきつた。

郷土誌懇談会を組織化することは、県立図書館でもかねがね検討中のことであつたので、早速計画は実行に移され、昭和三十一年九月十五日郷土誌懇談会組織化のための準備委員会が県立図書館で開催され、新たに会則を制定、十月一日を期して新発足をすることとなつた。そのとき会費年額一〇〇円というのがきまつた。これはもちろん会誌発行のためである。

十月六日第一回編集委員会が開かれた。会誌の体裁としては当時金沢で発刊されていた「加能民俗」を手本にして、隔月にA5判十二頁で出すことにした。頁数は現在十六頁建てになつているが、三段組で表紙なしの現在の体裁は創刊以来変つていない。

十月二十日第二回の編集委員会をもち、前回依頼した原稿を編集し、二十六日に初校を、三十日には再校を、そして予定通り、十一月一日に創刊号をこの世に産み出した。現在原稿を印刷所に渡してかと一カ月もかかる状態に比べれば、昔はスピーディでよい時代であつた。

雑誌を長く継続させるためには、一つには金銭的基礎をしつかりすること、一つにはよい原稿を努力して集めることが必要である。われわれは創刊当初からこのことを心配して、経理面については図書館側で、編集面については民俗学会側でそれぞれ分担して、責任をもつてやることにした。今日会員八百名に達するという状況は全く久我館長や佐々木幹事の経営の手腕によるものである。

編集の方は民俗学だけに片寄らないため、歴史関係の人に加わつてもらつた。初めわたしが編集事務を担当していたが、ある時期から委員の交代編集にした所、発行期日がドンドン遅れてしまつたので、また現在のように編集事務はわたしひとりでやらしてもらつて、定期刊行を堅持することにしている。

よい原稿を得るためには、編集委員の間で激論がかわされたことが二三回ある。会員の期待にそむかない雑誌にするためには、あまりいいかげんな編集は許されないからである。ない智慧をしぼつて新企画も考え出したりした。

本誌がアマチュア研究家の機関誌であるという根本性格は十年の間一貫して守られている。ただわたしたちが当初予期したよりは、全体の調子が高く、内容の固い雑誌になつたように思われる。